
その執事、大胆不敵

篁 霞流

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その執事、大胆不敵

【Nコード】

N6570Y

【作者名】

篁 霞流

【あらすじ】

ピレネー大陸の大部分を占めるカルデア神聖大統一帝国。

その帝国を築いたのは、不幸の果てに王位に就いた女王と泥の中から這い上がった執事であった。

彼らはいかにして、帝国を統べるに至ったのか。

その壮大な物語が今、始まる。

(R-15は念のためです。今のところ予定はありません。)

プロローグ

コルベール暦1544年。

その日、カルデア王国 王都ペンタグの王宮殿・フィラデルの大広間横、「控えの間」には静寂が満ちていた。

その部屋の奥にはカルデア王国第28代君主たる女王・シシリアⅡマイアーⅡド・イジュールが王座に泰然と腰かけていて、その数メートル扉側に下がった位置には一人の男が跪いている。

俯いて顔の表情を読み取ることが出来ないが、黄金に染まった髪は「控の間」の品の良い調度品に埋もれることなく、その姿に、一分の隙も見当たらない。

「面を上げよ」

女王の良く通る声が、白紙に落ちた一点の染みのように広がってゆく。

その声にこたえて、頭がゆっくりと持ちあがりその相貌が明らかになった。

雪のように白い肌に、紺碧と緋色のオッドアイは良く映えており、その男が「神の造形」と呼ばれていることをまざまざと思い出させる。

「フォンビレートⅡメイリーⅡダ・エルバルト。そなたを、第32代イジュール家の筆頭執事に任命する」

その男―つまり、フォンビレートⅡメイリーⅡダ・エルバルト―の目と、女王の目がゆっくりと合わさった。イジュール家つまり王家の筆頭執事に任命されるということは、内政のパワーバランスの重要な局面を荷っており、任命式に先立って王国議会の承認が必要で

あることが王国法第145条にて定められている。此度の任命においてもそうであり、先立って議会での議決を経ている。

「先だって行われた王国議会にて、異議10沈黙80により承認されている。よって、そなたにこの任の如何は委ねられた。この任、受けるか否か？」

女王直々の問いかけ。

その問いかけに誓いの言葉をもって答えることによって、終わりを迎える。

後々、各報道人によって国民に公開されることが決まっており、国民はそれに今代執事の力を見るのだ。よって、つつがなく終わらせることがなによりも重要であり、シシリアも廊下に控える重鎮たちもそれを期待していた。そしてそれは達成されるはずだった。

「――生涯の全てを懸けシシリア＝マイアー＝ド・イジュールの御為に働き、忠節に歩み忠誠を保つことをここに誓う。」

フォンビレートがシシリアの名に誓わなければ。

歴史書は語る。

彼の男。

碧き左眼と灼かな右眼あらたを持ち、頂に金色を纏い、黒衣を翻し、その純白の肌は朱が染め上げた。

唯唯王と共にあり、千里を焼き尽くす炎と万里を翔る翼を与えられた。
と。

カルデア王国史上唯一、君主のみに忠誠を誓った男。

「女王の懐刀」「カルデア王国の誉れ」「草原の栄光」とたたえられた男。

その才でもって、史上最高の為政者・シシリアⅡマイアード・イジュールのそばにあり続け、王国に繁栄をもたらした完全無欠の執事。

王の楯。王の槍。王の力。

フォンビレートⅡメイリーⅡダ・エルバルト卿。

彼の波乱に満ちた生涯は、この任命式を持って、本当の意味での始まりを迎えた。

騒動の始まり 前篇（前書き）

感想・御意見・御指摘 絶賛受付中です。
よろしく願います。

騒動の始まり 前篇

「なんてことをしてくれたのかしら、フォン？」

シシリアの冷たい視線にフォンビレートは一切動じなかった。

「申し訳ありません。偽りを述べることは許されない、と聞いたものですから」

素知らぬ顔をして、紅茶を手際よく入れている。

フォンビレートが前代未聞の誓いの言葉の改変を行った後、宮殿は大混乱に陥った。

なにしろ、録音された音源は国民に公開しなければならぬのだ。

「シシリアⅡマイアーⅡド・イジュールの御為に」ということはつまり、王家も国民も眼中にないと宣言したに等しい。影の執政官とまで言われる執事が「何かあったら、女王以外は見捨てます」と言っているなどあってはならないのだ。

かといって、仮にも「誓い」の言葉を録り直すわけにもいかない。カルデア王国には「誓約したことは果たせ」という簡潔かつ絶対の箴言があり、録り直すなどという選択肢は存在しない。たとえそれが儀礼的なものであっても、行ってはならないのだ。

それにも関わらず、顔色一つ変えない自らの執事に、シシリアは苛立ちも忘れて呆れていた。

「あなたね・・・事の重大さがわかっているの？」

その問いに、ついとほんの少しシシリア側に顔を向け、

「分っております」

と静かに答えるフォンビレートにシシリアは今度こそがつくりと肩を落とした。

「だいたいね、大人の対応っていうものがあるでしょう？お・と・な・のね。別にわざわざ入れる必要はないじゃない」

「しかし、入れない理由にはなりません。それは誤解を招くと知っ

ていながら行う性質の悪い、詐欺にも等しい行為です。陛下はまさかそのようなことを望んでおられたのでしょうか？それでしたら、私は深い謝罪を行わなければなりません。陛下の御心を酌めない私など・・・」

「もういいわよ！！」

フォンビレートの長々と続く嫌味にシシリアは白旗を上げた。もとより、口から生まれてきたとしか思えないこの執事に勝てた試しはない。かれこれ13年もの永い間、シシリアはただの一度もフォンビレートのあわてた姿を見たことは無かった。

「よくわかったからいいわよ。・・・あなたたつてもとからそうだし。・・・20も年下の男に言いくるめられる女王ってどうなのよ、本当に」

やや自嘲気味にぼそぼそと呟くシシリアは今年で43才であり、カルデア王国の寿命でいえば「中年」の部類である。一方、フォンビレートは今年18才になったばかりであり「青年」あるいは「少年」と呼んでもいい年齢であった。もちろん、歴代筆頭執事の中で最も若い。

「陛下、問題は22才年下かどうかではなく、たかが一使用人に勝手を許していることであるかと思われますが」

「うん、とりあえずそれ止めて頂戴。腹立たしくてこのまま王位も放棄してしまいたいから」

さりげなく正確な年齢差を示しつつ、真の問題点を指摘するフォンビレートをシシリアは半眼になって睨みつけるが、彼はやはり顔色一つ変えずに

「どうぞ。」

と何事もなかったようにこちらに向き直りつつ紅茶を差し出した。コトリ、と僅かに音がしてテーブルの上に湯気の立ち上るティーカップが置かれる。

「本日は、アルイケ産の茶葉を使用しております。こちらの地方の茶葉は近年人気が出てきており、試しに卸させてみました。お口に

合いましたら継続的に買い取りを行おうと思っておりますので、率直なご感想をお願い申し上げます」

さりげなく話題転換をされたことが、シシリアとしては大いに癪に障るのだが、実際このまま言い合いが続くほうが不毛であるのでしぶしながら紅茶に手を伸ばした。

口に含んだそれは、たしかに薫り高くほんのりと甘い。

「ん、美味しいわね」

シシリアは言われたとおりに、感想を漏らした。だが、

「それはようございました。毒入りの茶葉を注意深く避けた手間が報われたというものです」

「は？」

続くフォンビレートの言葉に思わず聞き返した。

「それはようござ・・・」

律儀に繰り返そうとする言葉を目線で遮る。

「なにに何がいられていたって？」

「昨日、商人より買い付けた茶葉に毒が入れておりました。・

・より正確に言うならば、毒で満たされた液体につけられた茶葉が

昨日、卸されました」

冷静に話すフォンビレートに対してシシリアはその事実の認識を拒否するように目頭を揉んだ。

この、恐ろしく頭のキレル執事がすべて手をまわしているには違いないのだが、続きを聞くのはなかなかつらいものがある。

「・・・いろいろ聞きたいことはあるのだけれど、・・・とりあえず、なぜ昨日のうちに報告が来なかったか、から聞きましょうか。なぜ？」

顔をあげたシシリアの顔が為政者のそれに変わる。

その信頼と猜疑の入り混じった視線を受けて、フォンビレートは口を開いた。

「昨日のうちに御報告申し上げなかったのは、毒入りの茶葉の回収に手間取っていたためです」

「大量に卸されていた、ということ？」

「いえ、そうではなく、王国中に出回っていたということです」

「・・・なんですか？」

「アルイケ地方の茶葉は、昨日の夕方に卸された茶葉が本年最初のものでした。よって、昨日は王国中に出回る予定でした」

「それで？」

「卸しに来た馬車を確認しところ、すべての茶葉が毒に浸された状態でした」

「・・・商人はどうしたの？」

「確認させるように要求しても動揺せず、むしろ、気に入られたのかと笑みを浮かべていましたので、ひとまずは害はないと判断して後回しにしております」

「・・・回収は？」

「滞りなく。ひとまず、王都中の貴族には触れを出し、また市場へ卸したものについては早急に買占め、宮殿倉庫に保管しております」

「・・・地方は？」

「そちらは、門のところとどめることができましたので1グラムたりとも外に輸送されてはおりません。本日、第14刻に事態の収束を確認いたしましたので、アフタヌーンティーとともに御報告申し上げます次第です」

その言葉にシシリアは壁の時計に目をやり、それから思いつき胡散臭い目をフォンビレートにやった。

「・・・あなたって二人いるのだけ？」

現在の時刻は14刻半。

つまり、フォンビレートが事態の収束を確認してから半刻しかたっていないのである。

「御冗談を」

「あなた、13刻の時点で控えの間にいたわよね？」

「もちろんでございます」

シシリアはフォンビレートがうなずくのを見ながら、自らも頭の中

で確認する。

「……どうやって動いたの……執事の儀式を進行しながら暗殺を食い止めるなんて……」

「恐れ入ります」

シシリアの言葉にフォンビレートは僅かに頭を下げた。

「で、黒幕は分かっているの？」

「大方は検討がついておりますが、確たる証拠はありませんので、追うのは無駄であるかと」

「だれ？」

端的なシシリアの言葉に、フォンビレートもこれまた端的に答える。

「ジェームスⅡダイナンⅡダ・アルイケ侯にございます」

アルイケ侯爵とはその名が示す通り、茶葉の産地アルイケ領をおさめる領主である。

王家にも近い家柄である。

「……根拠は？」

「そのことをお話しするためには、今年の春からの出来事を追う必要がありますがよろしいでしょうか？」

「話さない」

フォンビレートは黙って僅かに視線を下げ、了承した。

「今年の春のことです。門衛より「商人が面会を求めている」という報告が上がりました」

「昨年、ということは王宮殿ではなくメリバ宮殿でのことね」

メリバ宮殿というのは、王位継承権第1位の者が住まうことになっている宮殿であり、そこに住まうということは次期国王であることを暗示している。今年の春は、ヘンリル前国王がまだ健在であり、シシリアはそこで過ごしていた。

「はい。その通りでございます。シシリア様が遠出をされていたた

め、私が対応いたしました。その東門に現れた男は、ヒデロム伯の御用達商人であると言い、最近いい茶葉が手に入ったので是非賞味してくれないか、とのことでした」

ヒデロム伯爵領地はメリバ宮殿の周りにある。より正確に言うならば、ヒデロム伯爵領地内にメリバ宮殿という飛び地を王家が所有していることになっているのだ。よって、その地の行商がメリバを訪れたとしてもなんら不思議ではない。

「それで？ どうしたの？」

「丁重にお断りいたしました」

フォンビレートの答えに、シシリアの顔が険しくなる。

「なぜ？」

ヒデロム伯爵位は建国の時からつき従う名門貴族であり、名騎士を多く輩出していることから「忠義の伯爵」と呼ばれている。故に、王家からの信頼も厚く、宮殿の周りを任せるほどである。であるので、ヒデロム伯爵領に関してかなりの優遇措置をとることが暗黙の了解となっていた。

今回のような件がある場合、警戒はすれど門前払いするほどではない。

「理由は3つございます。1つは、その男が浅黒い肌だったことです。」

「それが？」

ヒデロムの住民は皆、東方系の血筋であり、その特徴は目のふちの赤みと浅黒い肌があり、おかしいところはない。

「極めて純粋な、浅黒さでございました」

純粋な、と強調したフォンビレートの言葉にシシリアは僅かに目を見開く。

「それは、変だわ。ヒデロムは既に混血の民族となっていて純粋な者などどこにもいない。せいぜい伯爵家が限りなく近い、ぐらいのものでしょう。そして・・・」

「はい、伯爵家が商人の振りをすることなどありませんし、まし

て私が伯爵家の人間を見分けられないはずはございません」

フォンビレートの自信を持った言い切りに、シシリアも頷くことで同意する。

フォンビレートが18才という若さで筆頭執事まで上り詰めることができた理由の一つは目鼻が効くことであった。国内のあらゆる貴族、その使用人に至るまでフルネームはおろか家族構成まで述べることのできる頭脳と、人並み外れた観察眼。

ゆえに、仮に伯爵家の者が冗談で変装していたとしても、彼が見破れないことなどあり得なかった。

「第2に、一昨年から昨年にかけて、ヒデロム領地は南のオルフェルが大飢饉に襲われております。無論、全体としては例年通りの収穫でしたから、死者は一人も出ておりませんし、表にもあらわれていません。しかし、オルフェルの特産品である茶葉は例年の10分の1しか穫れず、価格は高騰しました」

フォンビレートの言葉に、シシリアは報告書だけで上がっていた大飢饉の顛末を思い出した。確かに茶葉の価格は上がっていて、そのまま卸しては買い手がつくはずもなく、一方、その価格でなければ売り手の生活が成り立たなかった。そのため、ヒデロム伯の裁量により、救済措置がとられた。

「救済措置は、伯爵家が全ての茶葉を買い取り、領地に例年通りの価格で卸すこと」

「はい。それでも僅かに値段は上がっております。しかし、彼の提示した額は例年通りでした。よって、伯爵家に関係する人間ではない」

シシリアの雰囲気徐徐に鋭さを増してゆく。

「……第3の理由はなに？」

「第3は、その者の持ってきた茶葉を入れた麻袋から僅かにラベンダーの香りのしたことです」

「ラベンダー？ ヒデロムにラベンダーは咲かないはずよ？」

「その通りでございます。その者の衣服からも匂っていましたが、

おそらくは、ラベンダーの咲き誇る道を通ってきたものと推測されました」

「・・・」

「陛下、そのような道があるところをご記憶でしょうか？」

「・・・もちろんよ、アルイケ侯爵領とヒデロム伯爵領を結ぶ、3キロの道のり。特に、人目を避けて、野を突っ切れば余計に匂いが付くでしょうね」

ここにきて、問題の茶葉の産地・アルイケ侯爵領が登場した。

「はい。よって、門に現れた商人は、本人の申し立てたヒデロム伯爵領下の商人ではなく、アルイケ侯爵領下の商人であると結論付けました」

アルイケ侯爵領下の商人であるとすれば、最初の2つの違和感に対しても理由をつけることが出来る。アルイケ侯は確かに東方系の子孫であり、血統主義を標榜しているため未だその特徴が色濃く継がれている。

それに、アルイケ領は昨年は全体的に豊作あった。特に領の西側・キップは茶葉の出来がすばらしくよかったという。王家にも献上されたため、シシリアもよく覚えている。

「間違いないでしょうね・・・」

「はい、おそらくは。アルイケ領下であるならば、優遇の必要性はなく、むしろ領地を偽ったことでなおさら警戒の必要な人物であると言えます。よって、丁重にお断り申し上げました」

フォンビレートは、ぬるくなってしまった紅茶をさりげなく取り上げながら、話を締めくくった。別の茶葉に入れ替え、丁寧にお湯を注ぐ。その作業に細心の注意を払っているフォンビレートにシシリアの声がかかった。

「で？」

「で？とは？」

フォンビレートが哲学問答のように答えて見せれば、シシリアは盛大に眉をしかめた。

「で？は、で？以外の何物でもないわ」

と問答で返し、小さな意趣返しを行う。

「それでは、アルイケ産の茶葉が毒入りになったことと何も繋がらないわ。どうせ、有能な執事たるあなたには分かっているのでしょう？聞かせなさい」

「・・・ご要望とあらば」

シシリアの投げやりな言葉に、フォンビレートはまたも僅かに頭を下げて話し始めた。

「帰って行く男を隠密方につけさせました。案の定、その男はアルイケ領に帰って行ったわけですが・・・」

「何を見たの？」

「その茶葉を、途中のラベンダー畑の中に撒いた後、悠然と去っていったそうでございます。」

「まあ、用済みだものね」

シシリアは思ったより、それがひどい報告ではなかったのではっとしていた。ゴミの廃棄などして欲しくはないが、茶葉はそのまま栄養となるのだ。たいしたことではあるまい。

だが、その考えはフォンビレートの次の言葉で打ち砕かれる。

「その2、3日後、ラベンダー畑の4分の1が枯れ果てました」

「えっ？・・・そんなこと報告に上がっていないわ！！」

自分の知らない話が出てきたことに、シシリアは声を荒げた。どうして、そのような話が自分に上がっていないのだ、とフォンビレートを睨みつける。

「申し訳ありません。本来であれば、報告すべき事項ではありませんが、ちょうどその日はヘンリル陛下の1年に1度の視察の時期と重なり、シシリア様がお忙しくしてらっしゃいましたので」

フォンビレートの言い訳に、シシリアは頭に血が昇るのを感じたが、その一瞬後に青ざめた。あの時は、確か、ものすごく忙しくて――

「『そんな報告、どうでもいいのよ！！』とおっしゃったものです

から」

「・・・ごめんなさい」

シシリアは、自分の失態であることを認め小さくなる。

「いいえ、私のミスです。陛下の時期を見誤ったのですから。・・・

・問題は、その毒物の内容です」

シシリアの言葉を否定し、フォンビレートは強引に話を続けた。

「猛毒、シュバルツがそれでした」

「シュバルツ!？」

その毒物の名前に、シシリアは落ち込んでいたことも忘れて、叫んだ。

シュバルツというのは、「シュバルツの花」という植物の根からとれる猛毒である。致死量は小指の先ほどあれば良いとされており、盛られた場合、十中八九助からない。この毒の最大の特徴は、気化しようが液化化しようが粉状化しようが毒性を持ち続けることにある。つまり、吸うだけで死にいたる可能性すらあるのだ。よって、国の危険物指定を受けており、所持しているだけで罪になる。そんな毒が、得体のしれない商人の茶葉から出てきたのだ。

「では、ラベンダーへ追跡を行った者や、・・・あなたは？ 大丈夫だったの？」

心配げな瞳をするシシリアに対し、フォンビレートは僅かに微笑んだ。

「御心配には及びません。今回、シュバルツは粉末ではなく液体の形で用いられたようです。シュバルツに茶葉を浸し、それを持ってきたものと思われます。大地へ浸みこむことを止めることはできませんでしたが、素手で触る愚行さえ起こさなければそれほど被害はありません。そして、イジュール家にはそのような愚か者は存在しませんので、ご心配には当たらないかと」

「・・・あなたって良い性格しているわよね。・・・敵だって、まさか「愚か者」しか引っ掛らないと言われているなんて思いもしないでしょうに」

フォンビレートのイジュール家使用人としての誇りと敵を見下す気持ちがないまぜとなった言葉に、シシリアは呆れたように笑った。

「いえ、陛下に齒向かう者は全て愚か者にございますので、死ぬ者もあるやもしれません」

不敵な表情ではつきりと言い切るフォンビレートにシシリアは何とも言えない心持ちになった。彼の絶対の忠誠心はいつだって気持ちが良い。

「・・・続きはいかがなさいますか？」

「もちろん、聞くわ」

フォンビレートからの信頼を背に、シシリアは覚悟を決めて深くうなずいた。

騒動の始まり 後篇(前書き)

ここで、ストックがキレましたので（いや、早っ！とかいう突っ込みはなしでお願いします）更新が遅くなります。週1が限界です。で、ゆっくりお付き合いいただければ幸いです。

騒動の始まり 後篇

「では・・・」

シシリアの覚悟を受け、フォンビレートは話を進める。

「さて、アルイケ侯が陛下を狙ったという仮定を立てますと、動機が見当たりません。先の大戦の前アルイケ侯の働きはすさまじく、その働きへの報いとして侯爵位は授与されています。現アルイケ侯は野心のある人物ではありますが、陛下を毒殺することにより得られるものと、企みが明らかになった場合に失うものの比重が釣り合っていないように思われました」

例え、シシリアが殺されたとしてもアルイケ侯にはなんのメリットもない。確かに、国政の重要な局面に立ち会うかもしれないが、所詮は侯爵位であり公爵位には敵わない。もちろん、3公爵が愚かであれば違いかもしいないが、今代公爵達はそれぞれに優秀であった。故に、決定権を荷うことはまずないだろうと思われる。

「・・・それで？あなたの突き止めた動機って何かしら？」

「陛下、私が、一日の休暇を申請しました事を覚えておいででしょうか？」

「ええ、覚えているわ」

フォンビレートは5才の奉公以来、ただの一度も休暇を取ったことはない。彼自身に行くあても帰るあてもなかったこともあり、重度の仕事中毒者の側面があったためだ。休暇を取るように勧めても拒否し、無理やり休ませても邸内の草むしりを始めて、問いただせば「休暇ですので、自然と触れ合っております」としれっと言いつつ、だから、フォンビレートが「お暇を頂きたく・・・」と言った際、誰一人休暇の事だとは思わず執事を辞めてしまうのだ、と皆思い込み大騒動に発展したのだ。

「その日、私は王都に参りましてヘンリル陛下と非公式にお会いしました」

「父上と？」

「はい。目的は王国法の原本を見ること、もしくは内容を教えて頂く事です」

『王国法』とは、また厄介な話である。その名の通り、原則から細則までありとあらゆる法律が定められている。そのほとんどは国民議会により可決されており、誰でも見る事が出来るが、例外は存在する。

「原本・・・ということは、王位に関する法律が見たかったということ？」

王位に関する法律は、一般に公開されておらず（もちろん、基本的な部分は建国の際に明らかにされているが）王篡奪者による暗殺を防ぐため、基本的に第1位の継承者以外は発表されない。

「はい。その通りです。もちろん、ある程度の確信のもとに向かっておりました。」

「確信？」

フォンビレートの鋭い双眸がふっと鋭くなり、話が核心に近づいていることが分かった。

「陛下はご存じ無いかかもしれませんが、前アルイケ侯は、ヘンリル陛下の治世のおり、王位継承権を得たことがございます。流行り病により、一時的に直系王族が絶えた際、第1王女シュレ様の御子にあたる前アルイケ侯、当時のアルイケ伯が、第1継承者となり「アルイケ王太子」であったことがあるのです」

フォンビレートの言葉にシシリアは驚きを隠せなかった。

シシリアの知る前アルイケ侯は、野心はあるが王位篡奪を狙うようなものではなく、領地を良く治める為政者であった。昔、王位継承権を持っていたことなど知りもしない。もつとも、それはシシリアの生まれるずっと前のことであり、知っていなくとも当然と言える。逆に言えば、知っているフォンビレートがおかしいのであり、シシリアとしては問い詰めたい気持ちでいっぱいであった。それが、時間の無駄であることを承知しているので、それを断念して黙って先

を聞くことにする。

「2年ほど、より正確に言うならばコルベール暦1480年の秋までは第1位継承者であり、1501年まで継承権を保持していました」

「1501年、ということは、私が生まれるまでということね」

「その通りです。陛下の誕生により王位継承権第5位までが埋まったことになり、そこで前アルイケ侯は継承権を失いました。もっとも、第1継承権は随分と前からありませんでしたから、侯爵が継承権を失ったことはそう大きな話題とは成らなかったようですが」

「まあ、そうでしょうね。で、その話と今回の毒入り茶葉はどうつながるのかしら？」

「はい。前アルイケ侯の死後、相次ぐ事故死により陛下が王位に就かれることになりました」

「そうね。・・・あつ、もしかしてお兄様やお姉様を殺したのがアルイケ侯ってこと？」

兄や姉を失った悲しみを未だに引きずっているシシリアは血相を変えてフォンビレートに詰め寄るが、彼は首を振ってそれを否定した。「いいえ、それに関しては全く事故であることが、調査委員会によって証明されていますし、真相といったところで、推測に至るのがせいぜいです」

シシリアはフォンビレートの言葉に落胆したが、続く

「但し、それが原因であることは確かでしょう」

という言葉に、再び顔を上げた。

「えっ？」

「その死に、多くの人々が共通の懸念を抱きました。つまり、王家が途絶えた場合、内戦になるのではないか、という懸念です。しかし、王位に関する某かの動議は国民議会において提出された形跡はありません。かといって、懸念だけ抱いたまま何の手立ても用意しないということも考えにくい。とすれば・・・」

「御前会議ね・・・」

「はい、それによって何らかの手立てが用意されたと考えることが出来ます。それを確かめるため、ヘンリル陛下に面会いたしました。」

「・・・結果は？」

「もちろん、一使用人の立場で原本を見ることは敵いませんでしたが、ヘンリル陛下は質問に答えてくださいました。一昨年の冬に御前会議にて、王国法第1条に細則が加えられることとなったようです。」

「一昨年の冬・・・」

「はい、カイル殿下がお亡くなりになったころのことです」

第4王子であるカイルは、シシリアの5つ離れた兄である。当然、当時は継承順位が第1位であり、カイル王太子としてメリバ宮殿に住んでいた。ヘンリル国王も先は長くないことが予想されており、また、優秀であったカイル王子が継ぐことも貴族、国民ともに異議はなく、むしろ、その治世に期待するむきもあった。そのため、彼が肺結核で亡くなった時人々は悲しみにくれヘンリル国王もひどく沈んだ。結局、失意のまま昨年の冬に亡くなったわけだが。

「お兄様は優秀だったものね・・・私とは違い父上にも期待されていた」

正直に言えば、シシリアは誰にも「王」として期待されていなかった。もちろん、1人の子どもとしてそれなりに愛されていたことを否定はしないが、それでもやはり次期王としてメリバ宮殿に入ることになってヘンリルに挨拶に出向いてもいい顔をされなかった時の悲しみは深く根付いている。

「ヘンリル陛下は、陛下を失うことを恐れ、御前会議が提案した細則に反対されなかったようです」

シシリアの発言には特に言及せずにフォンビレートは続けた。フォンビレート自身としては、ヘンリルがカイルに多くの期待を寄せていたが特別シシリアの治世を心配していたわけでもない、と思っている。ただ、王位継承直前に失った、その喪失感に耐えきれず、王

位継承者として跪くシシリアの姿にカイルを見て直視できなかっただけではないかとも考えている。ただ、これは考えでしかなく、シシリアを慰めるには材料が足りな過ぎるため、フォンビレートが口出すことはなかった。面会に際してヘンリルが口にした事実のみを伝える。不確定なことを主人に対して口にはしない、というのがフォンビレートのモットーであり、それゆえ彼は「優しく」はないが「優秀な執事」であった。

「その内容は？」

シシリアもフォンビレートが話を逸らしたことに気付いたが、それが彼の誠実さでもあることを知っているので特に追及したりもしなかった。なにより、落ち込んでいる暇はない。

「『直系王族が死に絶えた場合、その直系王族第1子の男子の家系が王位を継ぐものとする』というものです。これは、御前会議により評決されたものであるため、一般には一切知らされません。また、第2位以下の王位継承権の発表も正式にはなされないため、国民が知るようになることは無いでしょう」

ようやくシシリアにも話の全容が見えてきた。

御前会議で決定されたということは公爵3人、侯爵4人の合わせて7人だけで採決を行われたことを指す。当然、その中には現アルイケ侯も加わっていたはずだ。王国法の原本はその7人と王の合わせて8人がいなければ決して開くことのできない王室金庫に保管されることになっており、よほどのこと無ければ確かめようとするものはいない。王位に関する法律は、公表の必然性をもたない。そして、王位継承者は御前会議内でのみ確認が行われ、「公式」の発表は行われない。

つまり――

「つまり、現在第1継承権は第2王子ミシエル様の御子ダン殿下ではなく、第1王女第1子前アルイケ侯の家系にあるということになり、陛下がなんらかの事情で王位を放棄された場合、王権自体がアルイケ侯の家系に移る、ということになります」

王家を守るための秘密を逆手にとって、アルイケ侯はまんまと第1王位継承者の地位を勝ち取ったのだ。シシリアは春に即位したばかり。つまり、メリバからの引越しは完了していない。また、王位継承などという早急な案件ではない報告を意図的に後回しにされれば、シシリアが聞くことは無い。当然、遅くともあと数カ月すれば第1継承者は発表され、その細則が明らかになるだろう。だが、それは数カ月先であり、このままシシリアが殺されれば、彼は誰にも気づかせずに王位に就く。

「おそらくアルイケ侯は、前アルイケ侯より王位が目の前にあったことを聞いたでしょう。そして、ちょうど良く直系の王位継承者が1人だけになった」

そこで、野心を刺激された侯爵が企てたのだ。時間をかけて。周到に準備をして。何も知らないまままでシシリアを消してしまおうとして。

「こうなると、本当に直系の王族が事故死であったかどうか疑問になってきますが、既に調べる術は失われております。当面にして唯一の問題は、彼が毒入りの茶葉を宮殿によこしたことです」

シシリアはしばし呼吸を忘れて、茫然とした。

アルイケ侯が裏切ったこともそうだが、その他の6家が間接的にこの暗殺を承認していることを知ったからである。彼らが御前会議にて提案される内容に事前に目を通さないはずがない。国政を担ってきた彼らがアルイケ侯の狙いに気付かないはずはないのだ。それを共同で提案したということは、「アルイケ侯が王位に就くことを彼らが認めた」ということである。もっと言えば、アルイケ侯が王位に就いた後、それを奪い取る算段をしているということに他ならない。

「彼らは……奴ら……」

シシリアの顔は怒りと悲しみと恐怖とで震えた。命を狙われることは何度もあった。貴族から狙われることも他国か

ら狙われることもあったが、国の重鎮たる7大公侯爵家に裏切られるとは、それも王位を継いだ直後に狙われるとは思ってもいなかったのだ。

「やはり父上は、私の事など気にしていなかったのだ―」
揺れる思考の片隅で考える。

父がアルイケ侯の、ひいては7大公侯爵家の企みを見逃していたはずはない。

つまり、自分は国政に難ありと判断され、殺されたとしても良いとされていたのだと。

ああ・・・

「王になりたいなどと誰が言った？」

「誰かがお兄様たちを殺した？」

「誰が・・・味方なの？」

次々と口から溢れる繋がりのない言葉は、悲痛な響きを伴って部屋に響いた。

そこに女王としての威厳はなく、ただただ父を慕い求める幼子の途方に暮れた表情があるだけである。

「いかがでしたでしょうか？ シシリア様」

突然、シシリアの絶望に一筋の声を通る。フォンビレートの冷たい声に、シシリアの意識が急速に浮上した。

目線を上げれば、フォンビレートのいつもの瞳がこちらを静かに見詰めていた。

その瞳は、彼が第三執事、つまりシシリア付きの使用人の中で最上級使用人となった日のことを思い出させた。

―約3年前。

フォンビレートは、ちょうど今と同じようにシシリアの側に立っていた。

その時、シシリアは王宮殿の近くアーデル宮殿に住んでいた。次期国王でない王族は全てここに住まう。シシリアもそうであり、しか

しそこに住まうただ一人の直系王族であるがためにその主でもあった。フォンビレートは15才。その若さでは・・・と多くの使用人から反対されたがシシリアはそれを押し切ったのだ。

その任命式―筆頭執事の任命式に比べればもっと簡素なものだが―にて、ヘンリルについていた当時のイジュール家の筆頭執事ダニタ・イエール・ダ・クレマは問うた。

「汝、何を願う」と。

それに答えたフォンビレートは一切濁りのない瞳でシシリアだけを見詰めて

「シシリア様は私の確信。私の信頼。私の全てにございます。」

「滅ぼせとおっしゃるのであれば徹底的に滅ぼします。壊せとおっしゃるなら完膚なきまでに壊します。守れとおっしゃるのであればどこまでもお守りいたします」

と言い切ったのだ。

それは、執事の答えとしてはとても合格点を与えられるようなものではなかった。

執事とは時に主人をいさめることも必要であり、全体としての主人の評判のために尽力する存在である。主人の願いを全て叶えたいというのが執事の本望とするところであるが、それだけで「良い執事」とは成りえないのだ。

だから、それを聞いたダニタも血相を変え、フォンビレートを叱ろうとした。

それを止めたのはシシリアであった。

「いいわ、いつでもどんな時でもあなたは私のただの味方でいなさい」

その言葉にフォンビレートは、頭を垂れることで答えたのだった。――

「王家など・・・この国など知ったことはありません」

それは、国民に聞かれれば啞然とするであろう一言。だが、シシリアにとってはなによりも甘い。「陛下」ではなく「シシリア様」と言うことによって、フォンビレートはシシリアの絶対の味方であることを示したのである。

「私の誓いの言葉は一片の偽りも含んではないのです。」
故にご命令ください、とフォンビレートはかつてのように頭を垂れた。手足となりましょう、と無言のうちに四肢を差し出すフォンビレートの仕草に、シシリアの頭が働き始め、この事態への最も効果的な処置を探し始める。

数分の沈黙の後、シシリアは命令を下した。

「――――」

「御意」

フォンビレートは優雅に一礼すると、シシリアの私室を出て行った。ただ、主の望むものを備える手段を整えるために。

解決策は皆同じ 前篇（前書き）

公言した期日を守れてよかった、と一安心の作者です。
引き続き、御感想・御意見応募しておりますのでよろしく願います。

解決策は皆同じ 前篇

「まったく、忌々しいものだ」

アルイケ侯ジェームズは、自分の屋敷の執務室にて壁をにらみつけるようにして独りごちた。

彼は、用意に用意を重ねた計画が寸前でとん挫したことに腹を立てていた。

「あの、くそ坊主め!!!!」

腹立ち紛れにたたかれた机は、大きな音を立てて震えている。

彼の言う「くそ坊主」とは、イジュール家の筆頭執事・フォンビレートのことであった。

今年、55才になったジェームズにしてみればほんのひよっこに過ぎないはずのフォンビレートに阻止されたことが、計画失敗のいらだちに拍車をかけている。

昨年の春の失敗の際には、失敗した男の首を打ち、代わりの者を雇うことで怒りをおさめたが、今回失敗したのは彼の腹心の部下である男だ。代わりなどそうそう見つかるはずもなく、首を撥ねられるはずもない。

「申し訳ありません。まさか、あのような手段を使われるとは思いません」

失敗した部下は、壁際にてうなだれている。

あのような手段、つまりフォンビレートのとった手段はシシリアの想像をはるかにこえる強引さで行われていた。非常識、と呼んでも差し支えないほどに。

「まさか、王国中に国庫の10分の1をばら撒いてまで回収に乗り出すとは思いませんでした」

部下の言葉にジェームズは一層眉間にしわを寄せ、先週の計画の顛末を思い出す。

そもそも、計画は2段階であった。

毒入り茶葉で殺してもよく、誰かが死んでもその対応を非難することとでシシリアを退位させることが可能なように計画を練っていた。

シシリアはこれまで表舞台に立ったことはなく、カイルのように国民の指示を受ける基盤があるわけでもない。貴族の間では、あの執事を使いこなしているということとで一目置かれていたくらいのもんだ。

よって、ジェームズが吹けば飛んでいくような政権である。それも、7公侯爵の暗黙の了解を経たのであり、1つでもシシリア側がミスを行えばそれで事足りることが明白であった。

だが、フォンビレートは対応においてただの一つもミスを犯さなかった。

彼は、商人が来た時点でジェームズの側近であることを見破ったそばりを見せたが、ただそれだけで特に言及しなかった。茶葉を確認しただけで、すぐに茶葉の回収にあたったのである。

もしも、その時に商人に扮した側近を拘束していたか、あるいは疑念を投げかけただけでもシシリアは非難されていただろう。彼は運んだだけの人間であるということを証明する十分な証人が揃えられていたからである。また、側近を捕らえようとすれば、彼は抵抗に抵抗を重ね時間を稼ぎ、その間に茶葉はばら撒かれていたはずだ。

だが、フォンビレートはそれをせず、ただ「茶葉を調べさせていたいただきたいのですが」と下手に出て、茶葉を確かめるにとどまった。よって、側近をだしにした時間稼ぎは使えなくなったのである。

次に、フォンビレートは茶葉を回収するために大胆な策に打って出た。

国庫の10分の1―本来は、王都から王国の最果て・コモロ辺境伯の領地までを結ぶ道路の整備に使われる予定だったお金―を使って、仕事にあぶれた男を1000人雇った。

彼らに「黒塗りの馬車を見つけたらすべて倒せ」と命令を与えて町中に散らしたのである。

それも、給金は後払いだと言って。

仕事を遂行できなければ給金をもらえないと知った彼らは猛然と街中を疾走し、命令通りアルイケ領下の馬車の特徴である黒い幌をまとった馬車を見つけたらもれなくすべて道にひっくり返したのである。

当然、茶葉でない品を運んでいる商人もアルイケ領下の商人でない者もいたが、フォンビレートはそれらの馬車に対して商品を3倍で買い取ることを取り決めて彼らを宥めた。

茶葉を運んでいた者に対しては「命にかかわる事態に対応しただけだ」と言って、その行為を正当化することで不満を抑え込んだ。

最後に、王都北門を除くすべての門に対して「緊急宣言」を発令。

すべて、閉鎖したうえで北門に殺到した馬車を1台1台丁寧に調べたうえで、茶葉を積んでいた商人だけより分けたのである。

そのより分ける作業が完了した、つまり、計画の失敗が明らかになったのは、ジェームズが事を仕掛けてから26時間後のことである。

その結末を部下から知らされた時、ジェームズは血の気が引いて行くのが分かった。

失敗に終わったことやそれによって自分が罪に問われるかもしれない、ということではなく、フォンビレートが任命式に出席しながら片手間に事態を収束させたことに鳥肌が立った。

「あの男は・・・どうなっておる!!」

彼の叫びに答えられる者は、彼の部下の中には誰もいなかった。

ただ、主とともに背筋の冷たいものを感じることしかできない。

「練り直すぞ・・・シュットガルツ。ルシアを呼べ!!」

ひとしきりに怒りを発散していたジェームズだが、すぐに頭を切り替え部下に指示を出し始めた。

同時に、フォンビレートに対抗するのにこれ以上はないと思える部下を呼びにやる。

ジェームズはフォンビレートの得体の知れなさを認めながらも、再び計画を練り始めた。

「・・・あ奴には隙はないが、シシリアの方は隙が大分ある。あの二人を分断するためにはどうすればいいと思う？」

シシリア、と呼び捨てにするジェームズは彼女を見下していた。彼の考えを最大限に良く解釈するならば、シシリアが政権を取ってもうまくはいくまいと思っており、国民の平和と安全のために自分は王位に就かなければならないということになる。

優秀な右腕を引き離せば、数段劣る頭脳しか持たぬシシリアはすぐにでもボロを出すはずだ。

そう考えたジェームズが計画の通達を行おうとした、その時――。

コンコン、と控えめなノック音が響いた。

「ルシアか？」

呼んだ者が来たのかと思い、誰何の声をあげた。

「いえ、お客様にございます」

だが、その期待を裏切り、扉の向こう側で答えたのは執事であった。先に人払いの命令を行い、自分が出てくるまで訪問者を知らせなくとも良いと伝えていたジェームズは多少いぶかしく思い、

「だれだ？」

と苛立ちもあらわな返事を返した。

廊下の向こう側から聞こえた声は、執事の声であり、今までになく焦っている。

「申し訳ありません。女王陛下の使いの方がお見えのようです」

女王の使い――

「フォンビレートか？」

心臓を鷲掴みにされる感覚に陥ったジェームズが、執事の微妙な物

言いにも気づかず、思わず呼び捨てにしたその言葉に答えたのは、彼が最大限に警戒していた者の声であった。

「ええ、あなたの憎きフォンビレートでございます」
むかつくほどに涼やかな声で。

ジェームズは呼吸も忘れて扉を凝視したまま固まってしまった。それに倣うように、室内にて指示を仰ぐため集まっていた全員も動きを止める。

その静寂の中、空気を一片も崩すことなく異常なほど静かに扉は開けられ、隙間から入った光が細身のシルエットを室内に落とした。それによって空気がほんのわずか揺らぎ、ジェームズは意識を取り戻した。

彼は、侯爵としては正当な権利を主張し、一步も立ち入ることを禁じようと声を張り上げようとした。

「貴様！なんの権限があつ・・・」

なんの権限があつて、侯爵執務室に立ち入ろうとしているのだ！！
そう続けようとした彼の声は、その陰の全体像が見えたことで途切れる。

入ってきたその男は、彼がここ数か月で見慣れた男そのものだったからだ。

「貴・・・様・・・・・・・・なぜ、お前が・・・・フォンビレートなのだ？」

混乱した彼の口からは、意味の通らない質問が零れおちた。

「さて、なぜでしょう？アルイケ閣下」

対する彼、つまりフォンビレートは顔に不敵な笑みを浮かべただけで質問に答えもせず、ずかずかとジェームズの目の前まで足を運ぶ。

「お久しぶりです。と申しましょうか・・・・はじめまして。がお好みですか・・・・それとも・・・」

頬をあげたまま小馬鹿にしたようにフォンビレートは続ける。

「御主人様、が一番しつくりくるでしょうか？」
御主人様、と彼が言った瞬間、ジェームズ以下すべての人間の顔から余裕が消え去った。

この時を遡ること、数ヶ月前。

メリバでのシシリア暗殺が失敗に終わった、ジェームズは衝動的に部下の首をはねてしまっていた。

その男は、そこそ優秀な駒であり、首をはねてしまったことを後悔していたジェームズのもとに、王立・ペンタグ孤児院の院長イッサラが訪ねてきたのだ。

彼は一人の孤児を連れ、その子を雇ってくれないかと頼みに来たのだった。

イッサラは王国内でも識者として良く知られた人物であり、ジェームズほか、現在爵位を継いでいる男子は彼の教えを一回は受けたことがあるといわれるほどである。

彼が、孤児院に秘蔵っ子を隠しているという噂は貴族の間でよく知られた噂であり、「その子を連れてきた」と言われて、ジェームズとしても喜んで会うことにしたのだ。

「ほう、この子ですか・・・」

ルシアです、と言って紹介されたその子にジェームズが会ってみれば、確かに顔には知性が宿っていた。

「ええ、頭脳だけならば、私をはるかに超えるでしょうね」

実際、イッサラのお墨付き同然であるので、すぐにでも使用人として迎え入れたいと感じたのである。

ただ――

「ただ、なぜそのような子を私どものところに連れてきてくださったのでしょうか？」

それだけがジェームズには不思議でならなかった。

それほどまでに優秀であるならば、公爵家でも雇われることは可能であったはずである。

アルイケ家は、7大公侯爵の中でも侯爵に叙任されたのはもっとも遅い。

先の大戦でアルイケ伯ケアリーが挙げた数々の戦績によって侯爵になったのである。

ゆえに、声がかけられるとすれば最後のはずであった。なにかあるのではないか、と疑うのも無理はない。

ジェームズの最もな質問にイツサーラは少し逡巡した後、口を開く。

「ああ・・・それは、彼が」

ゆっくりと伸ばした手がロシアの頭から茶色のかつらをはぎ取ると、純粋な黒髪が表れた。

「クメール人の子孫であると推測されるからです」

黒髪を見たジェームズは、ああ、と得心が行った様子でうなづく。

黒髪はカルデア王国の人間にとって、特に貴族にとって避けたい色の一つであるからだ。

そもそも、カルデア王国の成り立ちには、王国の南に位置する小さな国「神聖クメール帝国」が大きく関わっている。

神聖クメール帝国はピレネー大陸で最も古い国の一つであり、クメール人の神・イシュタルを信奉。

クメール人を至上とする文化が息づいている。

カルデア王国の建国の祖であるルツヤンIIアブネルIIダ・イジュールは純粋カルデア人と呼ばれる人種であり、神聖クメール帝国内でかなりの迫害を受けていた。

ルツヤンはカルデア人を含め北東に住むイシュマイカ人やトリニア人が迫害を受けることに我慢ならなくなり、少数のクメール人を巻き込んで帝国に対して反乱を起こした。

結果、独立は成り、今ではピレネー大陸第2の国なるまでになった

わけだが、その歴史ゆえにクメール人とその他の民族とは深い溝がある。

もちろん、少数とはいえ帝国のやり方に嫌気が差したクメール人も反乱に参加していたわけで、表だって嫌われているわけではない。だが、深層心理にはクメール人に対する嫌忌の念があるので、クメール人の特徴たる「黒髪」は歓迎されないのだ。

「なるほど、それで、先生はどこにも出さずにおかれたのですね」

「ええ。・・・ですが、先ほども申し上げた通り、彼はかなり優秀ですから私としては信頼できるところで働かせたいと思っています。そしてジェームズ。君は、血統主義の側面も持っています。能力を正當に評価できることを私は高く買っています」

イッサラの述べる通り、ジェームズは人種としての血にこだわるどころがあつたが、それでもそれだけで爪弾きにするような狭量な男ではなかった。

「先生に評価していただいているとは光栄ですね。・・・しかし、邸内にはそれにこだわる者もおります。具体的な能力などをお聞かせいただけると楽なのですが」

ジェームズの当然の要求にイッサラはどこか楽しげに口を開く。まるで、今から手品の種明かしをする奇術師のように、意味深な笑みを浮かべた。

「ルシアが、わが孤児院の図書を読破したのは10才の時のことです。その中には、私の著書がすべて含まれていました」

「先生の・・・？それは、本当ですか？」

思わず、といった調子でジェームズは聞き返した。

イッサラは識者とされているだけあって、その著書は100を超えとも言われている。

それだけではなく、彼が書き表わした本はすべて貴族の高等教育のおりに使われるものであって、英才教育も受けていない孤児に理解できるはずもないのである。もし、イッサラが述べるのが本当

ならば大天才児と呼んでも差し支えはない。

「ええ、読むだけでなく、完ぺきな理解も伴っています。どの本のどのページのどの行を指定しても諳んじることができ、それに解釈を加えることもできますよ。試してみてはいかがですか？」

驚くジェームズをイッサラは挑発してみた。

ジェームズもそこまで言われて引くわけにもいかず、生徒の時を思い出しながら全力で問題を出す。

「『王権の基盤』。王権の始まりについて、24ページ第1行目より暗唱の後、現王権への解釈を加えよ」

「『王権が与えられることになるのは以下の場合のみである。1、自然発生的に指導者を求めた者たちの後押しにより与えられる場合。この場合、大きな転換となる事件が必要となる。2、人間の欲望の果てとして、権力を求めたものがなんらかの方法により他を圧倒する場合。多くの場合、武力による解決が最も多い。3、同じ目的をもつ者同士が寄り集まり、その目的を達成した後、同士の中で決められた指導者がそのまま王権をもつようになる場合。』現王権は、コルベール暦1年、神聖クメール帝国の用いる年代記によればクメール暦895年。ルツヤンIIアブネルIIダ・イジュールが帝国の残忍な人種政策に反旗を翻したことに始まります。彼の反乱には、多くの民族が協調したことで達成されました。よって、先に述べた3つにより分類するとすれば、？に当てはまることになります。ただし、革命達成の後、内紛により王位は決定しましたから、？の性質も包含すると思われ、結論としてまとめらば『カルデア王国の王権は、帝国からの独立という共通の目的をもった者たちにより革命が成功したが、同士のうちほとんどの者が権力を欲し、その争いの果てにルツヤン初代国王が王位に就いたことに始まる』となります。以上、解釈終わり」

圧倒的なルシアの返答に、ただ茫然とジェームズは聞くことしかできなかった。

カルデア王国の成り立ちを正確に述べて見せたこともそうだが、現

王権の始まりを『欲望の果て』をも含むと正々堂々非難していせたことに驚いていたのだ。

カルデア王国内では、ルツヤンは英雄として奉られており彼を悪く言う者など一人もない。

ルツヤンは当然うけるべき王権をその手に確立するために戦った、とされており、悪者になるのはいつも彼以外の革命者である。

「驚いたな・・・先生、これは先生の教えですか？」

言外に、「これは謀反に近いですよ」と匂わせながらジェームズはイッサーラに問う。

だが、イッサーラの方でもルシアの回答に呆れたように笑い

「いや、ある日書庫から出てきたと思ったらこうなっていたのです」と言うにとどまった。

―これは、拾いものかもしれない―

ジェームズは胸が高鳴るのが分かった。

ルシアが自分でその考えに至ったということは、革命家としての素質があるかもしれないと考えたためである。

「君は、・・・ルシアは、もしも王権にふさわしくない者がいたらどうするのが最善と考える？」

「挿げ替えるのが最善かと」

ルシアの端的かつ苛烈な質問に、ジェームズは笑いがこらえ切れなくなった。

ああ、首を切ったことは正解だったかもしれない。

「先生、決めました。この子はアルイケ家で雇います」

宣言したジェームズにホッとした様子でイッサーラは息を吐いた。

「ああ、それは良かった。私も一安心というものです。・・・ジェームズ、どうかよろしくお願いしますね」

「もちろんです、御安心ください」

イッサーラの横で小さく頭を下げたルシアの方に目をやりつつ、ジェームズは胸を張ったのである。

その日から、ルシアはアルイケ家の執事補佐として働くことになり、期待を背かぬ働き手として屋敷内の者からの称賛を一身に受けるようになったのだが――

「ルシア・・・なぜ、お前はそれに笑うのだ・・・!？」

目の前にいる金髪にオッドアイを宿した「ルシア」をジェームズは見つめながら吐き出す。

なにが、なぜ、どうして、こうなったのか。ジェームズには検討もつかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570y/>

その執事、大胆不敵

2011年11月26日23時46分発行